

二〇二二年九月一七日

抱き上ぐる子に日の匂ふ花野道	なつき
破蓮のため息ならめ水の泡	素 秀
髪ゴムの鈴鳴らしゆく花野道	なつき
昨夜の雨木犀の香を沈めけり	わかば
参道に残る火照りや万灯会	なつき
街灯の切れし小路や月今宵	なつき
ガード下暗き溝より昼の虫	ぼんこ
長き夜の読書に倦みて数独す	こすもす
カリヨンの鳴りわたり朝澄めりけり	宏 虎
廃校舎跡に蛇口や芒原	かかし
風の萩茶室の木戸の見え隠れ	愛 正
かなかなや家路を急ぐ柚の背に	素 秀
住む人の居らぬ生家の昼の虫	む べ
月今宵一朵の雲も見当たらず	はく子

毎週句会秀句・みのもる選・二〇二二年九月一八日